高知大学地域連携推進センター監修

体験を学びつなげるパンフレット

高知県東部地域体験旅行

はじめに

「これは何ですか」、「美味しい！食べたことない味」、「楽しい」。高知県東部地域に学生たちの明るい声が響きます。

歩く、見る、聞く、話す、食べる、そして考える。体験プログラムとは、地域の自然や文化・伝統に触れ、地域の方との交流などの体験を活かした観光メニューです。

高知県東部地域は、世界ジオパークネットワークに加盟認定された室戸世界ジオパークをはじめとする豊かな自然、文化、食などの地域資源に恵まれ、これらの素材を活用した高知県東部地域ならではの体験プログラムが数多く用意されています。

私たちは、教育研究に携わる立場から体験プログラムを「学び」のフィールドと捉え、「自然・人の魅力・人の工夫を理解し、地域の様々なモノ・コト・ヒトに積極的に関わりながら考える力やコミュニケーション力を養成する」ことを目的に授業及び「えんむすび隊」[注)1]を実施しました。

本書は、高知県東部地域観光キャンペーン「高知家・まるごと東部博」の主催者である高知県東部地域博覧会推進協議会と高知大学との連携により実施した体験プログラム磨き上げ事業（平成26・27年度）の成果をとりまとめ、編集したものです。主に教育目的で体験プログラムを活用される中学校・高等学校の方々に、「体験を学びにつなげる」ために必要な視点や手法を盛り込んでいます。

学校では得ることのできない様々な学びが生徒・学生たちを待っています。さあ、「ようこそ高知県東部地域へ」。新たな学びの世界を体験してみませんか。

平成 27 年 12 月吉日

今城逸雄

赤池慎吾

注１：えんむすび隊とは？

高知大学が独自に開発した高知県をフィールドにした地域活性化人材育成プログラム「ワンデイスタディツアー」です。地域ニーズを受けて学内教員と受け入れ地域とでプログラムを企画・実施します。自然の美しさ、食の美味しさ、人々の暮らしに触れることで、学生自身が地域の抱える問題や社会とのかかわりを考え、行動を起こすきっかけとなることを目指しています。

高知大学地域連携推進センター監修

体験を学びつなげるパンフレット

高知県東部地域体験旅行

目次 CONTENTS

はじめに …… 2

「体験を学びにつなげる」ための手法 …… 4

受け入れ地域の声
高知県東部地域博覧会推進協議会事務局チーフ　名木栄作さん …… 7

体験プログラムに参加した学生の声
農学部3年　美馬紀子さん …… 7

学生を引率した教職員の声 …… 8

この冊子の楽しみ方 …… 9

体験プログラム

- 歴史・文化・自然！町なか宝探し（奈半利町） …… 10
- ナスって美味しい！収穫体験から見える最先端の農業（安芸市） …… 12
- 地球のロマンと地元愛に触れる（室戸市） …… 14
- 色と花に託したクロード・モネの想い（北川村） …… 16
- 地域の伝統食と作り手の想いを学ぶ　こけら寿司体験（東洋町） …… 18
- 中山間地域の暮らしと魅力を学ぶ（安田町） …… 20

おわりに …… 22

「体験を学びにつなげる」ための手法

体験プログラムをより効果的に生徒の学びにつなげるためには、様々なレベルにおいて、生徒と受け入れ側の地域の方との交流を促すことが大切です。生徒と地域の方のコミュニケーションこそが、体験プログラムの大きな魅力であり、学びの要素なのです。そのため、いかにして生徒と地域の方とのコミュニケーションを図るかが教育効果の質に関わってきます。私たちは、体験プログラムの鍵を握るのは、引率教職員のコーディネートにあると考えます。

以下では、体験プログラムを引率した高知大学教職員による「体験を学びにつなげる」ポイントを紹介します。体験プログラムが一過性の体験で終わらないよう、工夫してみてください。

事前に体験プログラムの目的を共有する

最も大切なことは、生徒に対して体験プログラムの目的を説明し、スケジュールや内容を事前に共有しておくことです。訪問する地域はどこで、何をするのか。地域の方への質問項目など、生徒の自主性を尊重しつつ、体験プログラムの教育的な視点を伝えることが大切です。移動時間や事前学習等で実践されることをオススメします。

生徒と地域の方との意見交換の時間を作る

生徒と地域の方とが直接会話を交わす時間を作りましょう。生徒と地域の方との交流を促すには様々な手法があります。高知大学では、ブレインストーミングと呼ばれるワークショップ形式を多用しています。

生徒と地域の方をいくつかのグループに分け、地域の魅力や体験プログラムを通じて感じたことや意見などを付箋紙に書いて模造紙に貼り出します。個々の意見についての判断や結論を出すのではなく、とにかく様々な意見を出すことが狙いです。生徒は、体験した内容を自分の言葉で表現する能力を養うことにつながります。また、地域の方は、生徒の意見を聞くことで、地域外の若者の視点から地域を見つめ直し、新たな地域活性化に挑戦するヒントを得ることができます。

旅程の都合で長時間の滞在が難しい場合は、体験の内容を漢字一字で表現するというワークショップがオススメです。30分程度の時間ではありますが、感じた内容を考え、他者に表現する経験を積むことができます。

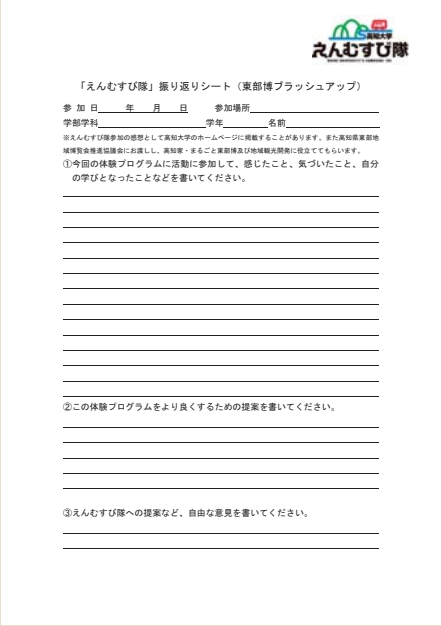
振り返りシートの記入

様々な企画が詰まった遠足・修学旅行等では、一つ一つの体験プログラムの成果について、じっくりと振り返ることは難しいでしょう。非日常を満喫している生徒たちは、一秒でもはやく次の場所に移動したいかも知れません。

高知大学で重視しているのは、体験プログラム実施後に必ず「振り返りシート」による振り返りの時間を作ることです。生徒が体験した内容を自分なりに見つめ直し、気付いたことや、感動したこと、考えたことを書き残すことで大きな学びにつながります。体験プログラム終了後に現地で記入することをオススメします。

「食事が美味しかった」や「景色が綺麗だった」といった表面的な気付きだけではなく、地域の方がどんな想いで活動していたのか、体験プログラムを通じて垣間見える地域の方の生活や暮らしはどのようなものかなど生徒への引率教職員からの呼び掛けも大切です。また、全旅程終了後に改めて生徒が何を学んだのかを振り返ることで、教育活動の成果をとりまとめる際に役立ちます。

参考までに高知大学で採用している振り返りシートの内容を紹介します。



えんむすび隊

「えんむすび隊」振り返りシート（東部博ブラッシュアップ）

参 加 日＿＿年＿＿月＿＿日　参加場所＿＿＿＿＿＿＿＿

学部学科＿＿＿＿＿＿＿＿学年＿＿＿＿名前＿＿＿＿＿＿

※えんむすび隊参加の感想として高知大学のホームページに掲載することがあります。また高知県東部地域博覧会推進協議会にお渡しし、高知県・まるごと東部博及び地域観光開発に役立ててもらいます。

①今回の体験プログラムに活動に参加して、感じたこと、気づいたこと、自分の学びとなったことなどを書いてください。

②この体験プログラムをより良くするための提案を書いてください。

③えんむすび隊への提案など、自由な意見を書いてください。

生徒と地域の方とのコミュニケーションを図るポイント

名札を作ろう

生徒に名札を付けて、地域の方から名前で呼んでもらえるように工夫しましょう。「生徒さん」と呼ばれるのではなく、「山田くん」「田中さん」と呼ばれることで相手と円滑にコミュニケーションを図ることができます。地域の方に対しても名前を伺って、名前で呼び掛けるよう工夫してみてください。

食事は一緒に食べよう

昼食や軽食、試食など、食事の時間はお互いのコミュニケーションを図る絶好の機会です。体験プログラムの中で食事をする機会を見逃してはいけません。机を囲む場合には、生徒と地域の方とを交互に座らせるなど、より積極的に話しかける雰囲気を作りましょう。みんなで食べるとより一層美味しくなること間違いありません。

体験プログラムによっては、一緒に料理をつくることもあります。共同作業は、コミュニケーションが活発になります。積極的に取り入れてください。

受け入れ地域の声

高知県東部地域博覧会推進協議会事務局チーフ

名木 栄作さん（高知県出身）

私は地元安芸市出身ですが、体験プログラムの受け入れを通じて、学生と同じ視点で安芸市以外の東部地域を訪問し、地域の方の意見を聞けたというのが新たな刺激になりました。

体験プログラムの受け入れを通じて地域資源に対する考え方も変わりました。生徒・学生を受け入れて改めて感じたことは、地域にあるそのままのもの「で」良い。そのままのもの「が」良いということ。それが地域外の人にとっては新鮮であるということ。「来てくれるからもっと新しいことを何かやろう」じゃなくて、普段通りのことをする。それを続けていくと、学生や観光客が来て地域活性化につながるのだと思います。

体験プログラムに参加した学生の声

農学部３年

美馬 紀子さん（徳島県出身）

私は、元々地域活性化や地方創生に関心があったわけではありませんでした。むしろ都会に憧れ、限界集落の問題さえ考えていませんでした。今回、体験プログラムに参加したことで、地方の見方や考え方が少しずつ変化してきたように感じます。

「見たい」「知りたい」という参加目的から次第に、地域活性化の意義について考えるようになりました。机上では学べない地域でのフィールドワークでわかったことは、地域活性化は地方で生きる人の思いを大切にするということでした。地方には、そこで住んでいる人々の思いがあり、それぞれに物語があります。そういった人々の積み重ねてきたものを、失いたくないと自分自身が思うようになり、地域活性化や地方創生に興味が湧いてきました。

どの体験プログラムにも共通して言えることは、地域は人と人とのつながりの上に成り立っているということです。社会を形成しているのは人間で、地域活性化とは地方に生きる人と人をつなげ、生き生きとした社会を形作っていくものだと思います。どんなに小さな限界集落と言われるようなところでも、人々が生きていた過去があり、人が暮らす現在があり、そして未来をつくりたいという意思がある。体験プログラムは、地域創生を考える始まりだと思います。

学生を引率した教職員の声

今城 逸雄
高知大学地域連携推進センター

地域に行った学生を見て思うことは、過疎高齢化、少子化、産業の衰退、担い手不足、まちづくりや観光開発の難しさといった問題を肌で理解していくということです。机の上で想像して分かったつもりになっていたことを、現状を目の前にして、地域の皆さんと一緒に汗を流したり、お話いただくことの言葉の一つ一つからリアルな理解を深めています。そのため体験後のワークショップでは、自分で考えた真剣な提案がどんどんと出てきます。自分の提案を高く評価してもらい、地域の方から「ありがとう」を言ってもらうと大きな自信につながります。学生は、これらの経験を通して、自分が住む地域の問題にも目を向けるきっかけとなっているようです。

赤池 慎吾
高知大学地域連携推進センター

高知県東部地域では、急速に過疎高齢化が進んでいます。その影響は、商業施設や医療機関の撤退、公共交通機関の段階的縮小など生活環境の悪化だけではなく、地域に住む人々の郷土愛や誇りの喪失といった目に見えないものにまでひろがっているように感じます。体験プログラムは、過疎高齢化が進行している地域にとって、地域の方が地域外の若者と一緒に地域を見つめ直し考える機会でもあります。地域の方は、学生の何気ない質問や驚き、感謝の言葉から地域の魅力や宝を再発見し、地域づくりの自信を得ています。体験プログラムを通じた生徒と地域の方との交流が、地域の明るい未来につながっています。

森　明香
高知大学地域連携推進センター

「豊かな自然」「歴史的な町並み」「過疎・高齢化」「伝統文化」。教科書やメディアなどに接する中で学生はこれらの語彙に触れ、日常生活や大学のレポートの中で使っています。ただ、これらの言葉が指す個別具体的な現実を必ずしも理解して使ってはいません。今回ご紹介した体験プログラムは、こうした言葉がどのような“現実”を表すために用いられるようになったのか、その一端を垣間見せ、参加者に考えるよう促してくれます。多くの学生が「考えが及ばなかった」「改めてわかった」と振り返りに書くのは、その現れだと思います。社会の現実と座学との往復を通じて、学生は多くを学び、考える。この事実を、引率を通じて私自身が学びました。

大道 知未
高知大学地域連携推進センター

生まれて初めて鎌で草を刈る、小学生から食べられる野草を教えてもらう、学校という場所を離れ地域に出た学生はいつも目をキラキラさせています。テレビや教科書で知ってはいても実際に見て触れて初めて身近な世界であると感じられたという声もありました。地域に出向き体験プログラムを経験することは「世界を広げること」につながっていると感じています。事前にその地域や体験プログラムについて調べる時間があればより深い理解へと繋がりますが、「ここを学んでほしい」と縛らずに体験中は地域の方とのコミュニケーションを通して何を感じどう考えるのかを大切にして頂ければと思います。

この冊子の楽しみ方

東部博体験プログラムでは、「海・マリンスポーツ体験」、「感動自然体験」、「ジオ体験」、「歴史文化体験」、「農林漁業体験」、「もの作り体験」といった東部地域独自の魅力ある自然や食、文化や歴史などを体験できます。

本書で紹介する体験プログラムは、学生による体験プログラムの磨き上げを通じた魅力の向上を目的に、高知県東部地域博覧会推進協議会が選定しました。そのため、本書で選定した体験プログラムには、一般旅行者には付随していないワークショップやヒアリング等も含んでいます。遠足や修学旅行等で体験プログラムを検討されている教育関係者の皆様には、より教育的効果を高めるワークショップ等の実施が可能かどうか、事前にお問い合わせください。

なお、体験プログラムは、平成27年12月現在の名称を用いています。

体験プログラムの内容

ここが学びのポイント！

どのような学びが期待できるのか。

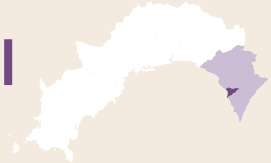
学生の感想

体験プログラムを実施した学生の声をお聞きください。学生のコメントをほぼ原文のまま記載しました。学年は当時。

体験プログラムの内容

- 歴史・文化・自然！町なか宝探し（奈半利町）
- ナスって美味しい！収穫体験から見える最先端の農業（安芸市）
- 地球のロマンと地元愛に触れる（室戸市）
- 色と花に託したクロード・モネの想い（北川村）
- 地域の伝統食と作り手の想いを学ぶ　こけら寿司体験（東洋町）
- 中山間地域の暮らしと魅力を学ぶ（安田町）

歴史・文化・自然！町なか宝探し ｜奈半利町｜



体験プログラムの内容

今日のフィールドは、奈半利町の歴史ある町並みと美しいサンゴの海です。梅雨時にもかかわらず爽やかな天候に恵まれました。

午前は、地域の歴史や町並み、自然などを活かした観光振興を考えている「なはり浦の会」が主催する町歩きツアーに参加しました。奈半利町は、明治から昭和の初めにかけて、絹や樟脳（クスノキから取れる衣類の防虫剤）の生産、捕鯨で栄え、今も当時を偲ばせる立派な建物などが多く残っています。

体験プログラムでは、県外出身者と県内出身者の2班に分かれて、なはり浦の会ボランティアガイドの皆さんと町並みを散策に出かけました。歴史・文化・生活といった幅広い解説に耳を傾けながら、奈半利町の登録有形文化財等を見て回りました。その後、班ごとに印象に残ったベスト5を壁新聞形式で報告しました。学生からは、高田屋の蔵、瓦壁・石壁が特に好評でした。

午後は海です！奈半利町海浜センターでシーカヤック・シュノーケリングを体験しました。インストラクターの熱い説明を聞き、いざ海へ！ほとんどの学生が初体験でしたが、サンゴが広がる海を満喫できました。

ここが学びのポイント！

文化財を保全する地域の方の想いを学ぶ！

日常生活において、若者が古い建物や町並みに興味をもち、その土地を訪問することは少ないでしょう。その意味で、奈半利町の町並み散策ガイドは、生徒の文化財への興味をかきたて、文化財尊重の態度を育成するのに適しています。

町歩きガイドを担う「なはり浦の会」は、地域の方の有志により結成されたガイドクラブで、観光利用を通じた町並みの保存を検討し、過去の財産を未来にどのように継承するのかという大きな地域課題に真正面から取り組んでいます。「なはり浦の会」との交流を通じて、文化財は保全しなければ消滅してしまうこと、なぜ保全に取り組んでいるのかといった想いを学びにつなげましょう。参加人数が多い場合は、適当な人数の集団に分けるなど地域の方との交流の機会を増やすことで効果的な学びにつながります。

体験プログラムに参加して、歴史や文化財に興味をもつようになり、文化財の保存活動に関わりはじめた学生もあらわれました。

自然の大切さ、保全に取り組む人々の想いを学ぶ！

奈半利町海浜センターは、海岸保全やサンゴ保全に取り組んでいます。サンゴを通じて自然の大切さや保全に取り組む想いなど、自然保護の態度の育成につなげましょう。

学生の感想

理学部1年　男子

奈半利町の町並み歩きでは、目を引くものが多くありました。ひとつは石塀です。丸石で作ったものと、半割にした石で作ったものの二種類があり、赤土で積み上げただけのシンプルな構造でした。規則正しく並んだ石に技術の高さを感じました。

また奈半利町の建物は高知特有の暴風雨にも耐えるよう工夫されたものが多く、水切り瓦はそれを象徴するものとして印象に残りました。建物下部の「雨黒」というシミも初めて見ました。

シーカヤック体験やシュノーケリングでは、海水やサンゴに触れることができ、高知の自然を知る良い方法だと感じました。水温の異なる海水の境界に生じる“ゆらぎ”も見られ、科学的な観点からも着眼点を持てそうだと思いました。

理学部1年　男子

今日のために昨日から案内することを考えてくださっていたらしく、僕は大変ありがたく感じました。「江戸時代の旅籠屋（西尾家住宅）」などに使われているガラスは、今現在窓などに使われているような透明なガラスではないため、壊れてしまうと修復が難しいようで、そういった建築物を今後どのように残していくかが課題であると思いました。こんなに優しい人もたくさんいらっしゃる素晴らしい町なので、僕も奈半利町のためにこの先少しでも貢献できればいいな、と思います。

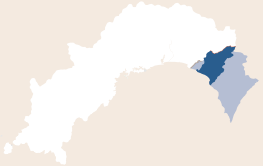
体験問い合わせ

奈半利町の町並み散策ガイド　TEL.090-1570-2225（なはり浦の会 森）
実施期間／通年　所要時間／2時間　最少催行人数／10人（少人数の場合は要相談）　料金／1団体2,000円～　予約期限／7日前まで

奈半利町サンゴウオッチング　TEL.0887-38-6500（奈半利観光案内所）
実施期間／通年　所要時間／40分　最少催行人数／3人　料金／500～800円　予約期限／前日まで

奈半利町シーカヤック・シュノーケリング体験　TEL.0887-38-5127（奈半利町海浜センター）
実施期間／4～10月　所要時間／1時間30分　最少催行人数／2人　料金／高校生以上2,000円、中学生1,500円、小学生1,000円　予約期限／2日前まで

ナスって美味しい！収穫体験から見える最先端の農業 | 安芸市



体験プログラムの内容

今日のフィールドは、高知県の基幹産業である施設園芸（ハウス栽培）の畑です。気持ちの良い晴天に恵まれました。

安芸市は園芸王国・高知を支える産地の一つで、今回の目的は同市の施設園芸産品であるナスの収穫体験とナスを使った料理作り教室です。

ハウス内は高温になるため暑さを避け、午前8時には安芸市赤野の圃場に到着しました。生産者に収穫の方法と注意する害虫などの手ほどきを受けながら、ナスを収穫しました。実際に収穫体験をして学生たちはナスにトゲがあることを知ります。また、ミツバチによる受粉の取り組みなど、農業の知恵と工夫を学びました。

会場を安芸市女性の家へ移して、安芸市施設園芸品消費拡大委員会と一緒に採れたてのナスを使った料理体験です。慣れない料理に悪戦苦闘しながらも、安芸市施設園芸品消費拡大委員会のサポートを受けて料理を仕上げていきます。安芸名物「ナスのタタキ」など趣向を凝らした料理ができあがりました。調理をするにあたり、衛生管理は行き届いており、安心して作業を見守ることができました。

午後は、実際に農業に従事されている生産者から、環境に配慮した栽培システムについて説明を受けました。天敵昆虫を使って農薬を少なくする取り組みや、二酸化炭素の濃度や温度を調整し収穫量を増やす取り組みなど、生産者から最先端の農業を学びました。

その後のワークショップでは、生産者と学生とが「農産物を消費拡大するためのアイディア！」について話し合いました。グループからは、「ナスまつり」、「農業体験ツアー」、「農業を疑似体験できるネットゲーム開発」といった意見が出されました。

ここが学びのポイント！

最先端の一次産業を学ぶ！

ナス収穫体験の学びのポイントは、なんといっても最先端の農業技術を生産者から直接教えていただけることです。都会に暮らす多くの生徒たちは、農業と聞くと老夫婦が鍬を持って畑を耕し、天候によって収穫量が左右される昔話に出てくる「畑しごと」を想像することでしょう。

高知県東部地域は施設園芸発祥の地で、現在まで様々な技術開発が行われてきました。生産者は非常に研究熱心で、最先端の科学技術の導入に積極的です。ナス収穫体験を通じて、日本の新しい農業の姿を学ぶことができます。

畑から食卓までまるごと体験できる！

経済のグローバル化に伴って食料の生産・加工・流通・消費・廃棄という一連の流れが高度にシステム化された現在の日本では、「食の安全・安心」を判断することが容易ではありません。ナス収穫体験及び野菜料理作り教室では、畑で生産者と共に野菜を収穫し、調理し、それを食べるまでの一連のフードシステムを体験することができます。

生徒たちは、体験プログラムを通じて食料を生み出す自然環境・農業技術・生産者の役割について理解を深め、食べ物の大切さや感謝の気持ちを学ぶことが期待されます。

体験問い合わせ

ナスの収穫体験　TEL.0887-34-8325（ＪＡ土佐あき）
実施期間／10～6月　所要時間／1時間　最少催行人数／2人　料金／1,500円　予約期限／7日前まで
※時期により様々な収穫体験が用意されています。

野菜料理作り教室　TEL.0887-34-8325（ＪＡ土佐あき）
実施期間／10～6月　所要時間／3時間　最少催行人数／5人　料金／3,000円　予約期限／7日前まで

学生の感想

農学部2年　女子

今回初めてナスの収穫体験に参加して、大きさや重さを考えて収穫する難しさがわかりました。

普段スーパーマーケットや八百屋で野菜が並んでいても、農家さんや物流に携わる人の苦労にまで考えが及ぶことはないですが、実際に体験してみてこれからは考えるように心がけます。

ひとり暮らしなので調理も食べるのもいつもは一人ですが、今日はみんなと盛り上がって、とても楽しい時間を過ごすことが出来ました。特に地域のみなさんは明るくて親しく接してくれたのがうれしかったです。収穫から調理、食べるまでの一貫した流れを全て自分ですることで食べ物のありがたみに気づくことができました。今回の経験のおかげです。

人文学部1年　女子

ナス満載の一日、楽しかったです。ナスを収穫するときには、ナスの収穫のかたわら、害虫や天敵についてのお話や病気のナスの判断の仕方などから、ハウス栽培のメリットやデメリットまで様々な話を聞くことが出来たのでとても面白かったです。特に二酸化炭素をハウス内に充満させて光合成を促す話は興味深くてあとで調べてみようと思いました。

そのあとの料理作り教室も、お手本を見せていただきながら調理できたので、とても分かりやすかったです。完成した料理もとても美味しく、農作業後の空腹もあいまって箸がどんどん進みました。ナスのじゃこ煮がとても美味しかったです。

農学部1年　女子

ナスの育て方や調理の方法について詳しい説明をしてくださりありがとうございました。

今回の体験プログラムで天敵農法やミツバチによる受粉など授業で学んだことを実際に見ることができました。また、市場に出るための条件など普段聞くことのできない貴重なお話を聞くことが出来ました。

地球のロマンと地元愛に触れる ｜ 室戸市 ｜

体験プログラムの内容

今日のフィールドは室戸世界ジオパークです。室戸市全域がジオパークで、すべてが学びのフィールドです。

午前は、ジオパークビジターセンターで地理専門員の説明を受けました。地質に関する専門的な内容を、わかりやすく・楽しく解説いただきました。数千万年という時間軸で変化し続ける大地と、その大地に暮らす室戸の人々の営みを知ることができました。現地見学では、地理専門員の解説に耳を傾けながら実際に見て・触れて、ジオの恵みを体験しました。

その後、同市室戸岬町の高岡地区で、「高岡のおいしい食べ物」をテーマに、地域の方にヒアリングを行いました。学生は戸惑いながらも、勇気を出して地域の方に突撃インタビューをしていました。ヒアリングでは、マンボウの煮付けなど、室戸の豊かな海の恵みを知ることができました。

昼食は、海の駅とろむに移動してカツオのタタキ体験です！高知らしいダイナミックな調理方法に学生たちから歓声が上がりました。さばき方・あぶり方のレクチャーを受けた後、新鮮なカツオを自力でさばきました。みんなで作業を分担して、おいしいカツオのタタキのできあがり。

午後は、同じ敷地にある室戸ドルフィンセンターでドルフィンタッチを体験しました。普段なかなか目にすることのないイルカを前に学生も目をキラキラさせていました。指導員の方の笑顔やイルカとの触れ合いに多くのことを学んだようでした。

ここが学びのポイント！

大地の躍動とそこに暮らす地域の方の知恵を学ぶ！

普段であれば見過ごしてしまう海岸沿いの岩や地層。室戸ジオパーク推進協議会・専門員の説明を聞くと、しましまの岩からは地球の息吹を感じ、変形した地層は地球が描いた絵画のように見えてきます。

室戸市には専門員が駐在しています。高い専門性を持ち、対象者にあわせてわかりやすく、親しみやすい言葉で語りかける専門員の解説に耳を傾けましょう。学校で学んだ地学や地理の知識と、専門員から学ぶ知識とが融合することで、さらなる学びにつながることでしょう。

平成27年4月には室戸世界ジオパークセンターがオープンしました。ぜひ、お立ち寄りください。

体験問い合わせ

室戸岬ジオガイド散策　TEL.0887-23-1610（室戸ジオパーク推進協議会）
実施期間／通年　所要時間／1～2時間　最少催行人数／1人　料金／900円～　予約期限／要相談

カツオのわら焼きたたき作り　TEL.0887-22-2176（海の駅とろむ）
実施期間／通年　所要時間／30分　最少催行人数／1人　料金／1,000円（魚代別途）　予約期限／3日前まで

ドルフィンタッチ　TEL.0887-22-1245（室戸ドルフィンセンター）
実施期間／通年　所要時間／約15分　最少催行人数／1人（定員50人）
料金／760円、子ども650円　予約期限／不要（夏期は要問い合わせ）

学生の感想

農学部1年　女子

付加体の話やヒアリング調査、カツオの調理など、どれも新鮮で楽しかった。付加体の話を聞く前は「大きな変な模様の岩」くらいにしか思わなかったけど、話を聞いた後に見たら、とても壮大なものに見えた。化石や地震、波の跡も見ることができた。綺麗な層になっていて、本当にミルフィーユだと思った。

インタビューでは「○○が詳しい」「△△が話してくれる」とどんどん色んな人を紹介してくださり、たくさんの方からお話を聞くことが出来ました。

カツオのタタキづくりでは、あんなに立派な魚をさばいたことがなかったので楽しくもあり少し緊張しました。藁をくべるときは火傷しそうで、少し怖かったです。こんなにたくさんのタタキを食べたのは初めてで嬉しかったです。

農学部2年　女子

ジオパークの地形・地質が貴重なものであることを初めて知りました。以前、一度来たことがあり、その時は地形が変わっていることがすごいと感じただけでしたが、今回、専門員の解説を聞き自然の雄大さに一層感銘を受けました。ただの岩の塊だと思っていましたが、ジオパークには太古の地球の動きという大地のロマンがつまっているものだと思うようになりました。

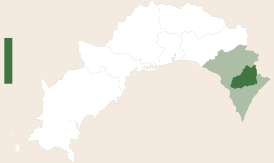
教育学部2年　女子

室戸市は初めてだったのですが、こんなすてきな場所があるんだと感心しました。生き物、自然がそろっている室戸をもっとアピールし、行ったことがない人にも知らせたいなあと思いました。

ドルフィンタッチは感動しました。次は一緒に泳ぎたいなと思いました。イルカはとても、かわいくて、頭がよくて触るとすこし堅くて、ナスのようで、でもどこかあったかくて生きているんだという感覚が伝わってきました。

ドルフィンセンターで働いている人に注目すると、みんな笑顔で、お客さんに対してイルカを好きになってほしい、イルカを知ってほしいと思いながら対応しているようにみえました。これは、私も仕事を始めた時に忘れてはいけない心構えだと思います。私も、ドルフィンセンターの人のように笑顔で接客できるような人になりたいです。

色と花に託したクロード・モネの想い ｜ 北川村 ｜



体験プログラムの内容

今日の学びのフィールドは北川村のモネの庭です。あいにくの雨でしたが、庭師の説明を聞きクロード・モネの世界に引き込まれました。

「私たちが目指しているのは、きれいな花を見せる庭作りではなく、モネの描いた景色の再現です。花は絵具なんです」と庭師の説明からはじまった今回の体験プログラム。さっそくモネの庭を熟知する庭師の想いに触れます。水の庭では、モネが咲かせることのできなかった「青い睡蓮」の美しさを堪能しました。北川村だけにある光の庭では「フランスの本家から託された願い」を伺い、遠くフランスへ思いを馳せました。

そんな庭師の指導を受けて、駐車場の花壇の草引きなどをお手伝いさせていただきました。お客様をお迎えする大切な玄関口に、学生なりに考えたレイアウトで花を植えていきます。庭師の気持ちを体験することができました。

その後、場所を室内に移し、押し花アートを体験しました。先生に指導を受けながら草花で描いた作品は、それぞれの個性ある色とりどりの作品に仕上がりました。後日談ですが、学生たちの最も印象に残った体験プログラムの1つがこの押し花アートでした。学生は「無心になって作品作りに没頭した」、「綺麗な庭を見て、想像力をかきたてられた」と自分なりのモネの庭を表現していました。

午後は、庭師や職員と一緒に、若い世代にモネの庭をアピールするためのキャッチコピーを考えました。学生からは「花に囲まれているといつもより可愛く見えるから、それを表現しよう」、「忙しい現代人の癒しにいいかも」、「青い睡蓮を咲かせたことがすごい」、「庭がパレットのようだ」など感じたことを言葉に落とし込んでいきました。

ここが学びのポイント！

庭師の仕事に対する情熱がすごい！

モネの庭は、色とりどりの花々や緑の香りを楽しむことができます。その庭を管理しているのが庭師です。ぜひ、直接お話を聞いてみましょう。庭師は職人としてのプライドを持ち作業にあたっています。それら一つ一つの情熱と作業が、モネの庭というひとつの作品を生み出していることがわかります。

体験問い合わせ

北川村「モネの庭」マルモッタン　TEL.0887-32-1233
開園／10:00～17:00(7月・8月は9:00～16:00)　休園日／火曜(祝日は開園)、1月10日～2月末　入園料／700円、小・中学生300円

モネの庭見学＆押し花小物作り　TEL.0887-32-1233（北川村「モネの庭」マルモッタン）
実施期間／4～12月　所要時間／2時間　最少催行人数／5人　料金／1,200円～　予約期限／5日前まで

学生の感想

人文学部3年　女子

今日は雨でしたが、色とりどりの花を見て・触れて・感じることができ、庭師のガイドのおかげで120倍楽しめました！

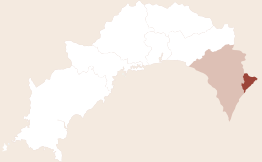
施設の皆さんとの交流では、一人一人がモネの庭に対して誇りを持って仕事をしていることが伝わり、就職活動を目前にした3年生の私にとって「仕事」に対する姿勢も勉強になりました。地域の食材も美味しくいただき、押し花体験までさせてもらって、庭師・職員の皆さんには本当に感謝しています。自分が暮らす高知についてもっと知りたい！と思わせてくれる一日でした。

農学部1年　女子

庭師の方の説明を聞きながらの園内散策はとても面白かったです。庭師の「モネの庭」に対する熱い思い、かつてモネが夢に見た青いスイレン、生きた化石であるメタセコイアなど想像以上にすばらしい場所であると感じました。若い世代の来園者が少ないということですが、もしかすると「モネの庭」が高知の北川村にあることを知らないだけで、「モネの庭」には興味のある若い人もいるのではないかと思います。

今日は、管理の行き届いた色彩溢れる「モネの庭」に来ることができ、また庭師・職員の方々の熱い想いにふれることができ、本当に良い経験となりました。

地域の伝統食と作り手の想いを学ぶ　こけら寿司体験 | 東洋町 |



体験プログラムの内容

今日の学びのフィールドは高知県東端の東洋町です。学生が数ある東部博体験プログラムの中から、こけら寿司作り体験を選びました。

朝5時半に高知市内を出発した一行は、午前9時に東洋町中島地区に到着しました。こけら寿司体験教室のご指導のもと「こけら寿司」作りを体験します。

こけら寿司は、高知県東洋町の郷土料理です。ほぐした焼き鯖の身をゆず酢のご飯にまぜ、その上ににんじん・椎茸・卵・にんじんの葉をちりばめた押し寿司です。何層にも重ねて作るのが特徴です。昔はハレの日（祝い事や神祭など）に欠かせない料理でしたが、最近はこけら寿司を作る家庭が少なくなったようです。

グループごとに用意された見慣れないこけら寿司用の木枠に、ご飯を均等に敷き詰めます。そして色どりよく具材を並べ、一生懸命押し固めます。さらにもう一段重ねた後、上に重しを乗せ30分ほど待ちます。その間、学生が地域の方を囲み東洋町のことやこけら寿司の歴史、ゆず酢の作り方などいろいろなお話を伺いました。

重しを退け、木枠を外し完成したこけら寿司が見えると学生からは歓声が上がりました。包丁で大胆に切り分け、大皿に盛りつけ一緒にいただきました。全員が初めて目にしたこけら寿司でしたが、もう一つ、もう一つと次々手を伸ばし大満足の様子でした。何よりも夜中の１時から準備をしてくださっていたこけら寿司体験教室の皆さんの笑顔や心遣いに心を動かされたようでした。

ここが学びのポイント！

「なぜ伝統を守るのか」伝統食を継承する人々の想いに触れる！

高知県東部地域には、様々な伝統食が残っています。こけら寿司も高知県東部地域を代表する伝統食のひとつです。しかし、年々、伝統食が食卓に上ることは少なくなり、伝統を継承する方々の知恵や技術は失われつつあります。

ご指導いただいたこけら寿司体験教室は、「昔の記憶を残すためにこけら寿司を作り続けている」そうです。単に「伝統だから」という理由ではなく、ハレの日に皆で食べた思い出も一緒に地域に残そうとしているように感じられます。伝統食の継承に携わる方々との交流を通じて「なぜ苦労をして伝統を守るのか」という大きな課題を考えるきっかけになることでしょう。

体験問い合わせ

田舎体験こけら寿司作り体験　TEL.0887-29-3566（こけら寿司体験教室）
実施期間／通年（ユズ収穫体験は11月）　所要時間／3時間30分　最少催行人数／6人
料金／2,000円、小学生以下無料　予約期限／7日前まで

学生の感想

理学部1年　男子

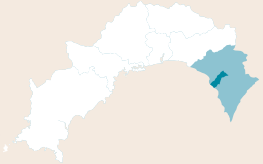
こけら寿司作りを教えてもらう中で一番難しかったのは、具材の置き方です。ニンジンの上に他の具材が重ならないように置くことに苦労しました。カチカチに固まって食べられなくなるのではないかと思うくらい板で寿司を押して、重しをのせてさらに30分。その後、板を抜く際の感動は、言葉にできないほど素晴らしかったです。

指導してくださった方のお話を伺うと午前１時半に起きて、こけら寿司を作って、朝市で販売したそうです。この先も後世にこけら寿司を伝えていきたいという熱心な気持ちが伝わってきました。僕も、この伝統あるこけら寿司を周りの友達等に伝えていきたいと思うし、機会があればまた作りに来たいと思います。今日は貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

農学部4年　女子

「昔は、こけら寿司を囲んでみんなでおきゃくをしたんよ。近所で集まってわいわいするのが楽しかったわ。その思い出を残していきたいんよね。」そんな理由があって、こけら寿司を作り続けているそうです。地域の伝統食には１つ１つにこんな想いがこめられていて、そんな食べ物が高知にたくさん残っていることはとても素敵なことだと思います。ですが、「みんながこんなに喜んでくれるのが不思議」と話されていたように、伝統文化の魅力は地元ではあまり認識されていない事がもったいないと感じました。この体験プログラムを通じて、地元の方も地域文化の魅力を再発見できるといいなと思っています。

中山間地域の暮らしと魅力を学ぶ ｜ 安田町 ｜



体験プログラムの内容

今日の学びのフィールドは安田町集落活動センターなかやまです。5月、ゆずの花が咲く中山地区に、学生たちの明るい声が響きました。

安田町中山地区は、中山を元気にする会が中心となり、集落活動センターなかやまの立ち上げ、地域づくりに取り組んでいます。今回は、中山地区の特産品である自然薯（ジネンジョ）をテーマに、農作業を通じた地域理解に取り組みました。

午前は、地域の方に手取り足取りご指導いただきながら、畦づくりや植え付けを行いました。学生は、初めての作業に戸惑いながらも、熱心に鍬を振りました。どうやって自然薯を植えれば良いのか、赤土と腐葉土の違いは？学生たちからの質問に地域の方は言葉を詰まらせながらも、丁寧に解説してくれます。自然薯がしっかり育つように願いながら、一つ一つ丁寧に作業をしました。この日に作業した約2畝（2アール）の畑は、学生と地域の方の出会いの場となりました。

午後は、3つのグループに分かれて、地元学注）2に出発です。地域の方の案内で文化財や自然資源、地域の暮らしを巡ります。地域の方との交流から学生は地域を学び、地域の方も地域を見つめ直すキッカケとなったようです。その後の地域づくりワークショップでは、安田町中山地区の地域資源・良いところについて、学生の気付きを伝えました。

注2：地元学とは？

熊本県水俣市の吉本哲郎氏が提案した地域を足下から見つめ直して、地域づくりにつなげる取り組みです。「地域のことをみんなで知れば、新しい何かが生まれる」という地域づくりの実践的手法で、国内はもとより海外でも実践されています。

ここが学びのポイント！

過疎高齢化の最前線！地域課題とその対策を学ぶ！

近年、過疎高齢化や少子化が地方だけではなく、日本全体の問題として広く社会に知られるようになりました。安田町中山地区は、人口約550人、高齢化率約50%となり、教育施設の閉鎖や商業施設の撤退など様々な地域課題が顕在化しつつあります。

安田町集落活動センターなかやまは、地域の方に寄り添い、町外の協力者と連携して地域課題に取り組んでいます。体験プログラムを通じて、中山間地域の良いところだけではなく、中山間地域での経済的な自立の難しさ、高齢者だけになっていく悲壮感と、それに対応していく地域づくりの実践を学ぶことができます。

地域の方との交流を通じて、「過疎高齢化」や「地域活性化」という意味を学生たちが理解し始めたように感じます。

体験問い合わせ

安田町集落活動センターなかやま　TEL0887-30-1750
〒781-6430　高知県安芸郡安田町正弘1538
※体験プログラムを計画中。研修・体験内容については直接お問い合わせください。

学生の感想

大学院2年　男子

普段何気なく食べている食材を一から作る体験をして、「食のありがたみ」を実感することができました。そして一人一人が愛情を込めて育て上げた食材なだけに、昼食の品々は格別の味でした。今日のような「楽しい食卓」を満喫できたのは、中山地区の方々の優しさと元気の賜物だと思います。そして何より、皆さん一人一人が地元を愛しておられ、楽しそうに笑顔を絶やすことなくいらっしゃる姿が印象的でした。この活力があってこその中山地区であり、まさに「キラリ輝く」というワードがぴったりな町だと感じました。そんな皆様の姿を見ていて、こちらも元気をもらい、生きていく上で「人と人とのつながり」がいかに大切なことか、今一度認識できました。

人文学部1年　女子

私は初めて安田町に来ました。自然薯を植え、そして地元の方々とお話をしたりする体験は、予想以上に楽しくて充実した経験となりました。今回の体験プログラムで気付いたことがあります。それは、安田町は自然豊かで美しい所だという以上に地元の方々が安田町を愛しているということです。私は将来、地域活性化に携わる仕事をしたいと思っているのですが、地域活性化のためには行政だけが頑張るのでは意味がありません。地元の人々がその土地に誇りを持ち、協力して初めて地域活性化が成り立つと思います。だから、安田町の方々はとても素晴らしい人だと思いました。ぜひまた行ってみたいと思いました。

おわりに

私たちと同じ昭和生まれの人々は、教育旅行と聞くと、バスガイドの解説を聞きながら学生服を着た団体客が神社仏閣や美術館などを巡る「修学旅行」や「遠足」を思い描くのではないでしょうか。

今回、私たちが経験した体験プログラムの多くは、これまで私たちが思い描いていた教育旅行とは異なり、日常では決して出会うことの無い新たな驚きと知的好奇心をくすぐる刺激に満ちあふれたものでした。安芸市ナス収穫体験では、蒸し暑いハウスに立ち入り、生産者の愛情を込めて育てられたナスを一つ一つ丁寧に収穫しました。東洋町こけら寿司体験では、伝統文化を継承されている女性たちの想いに触れ、できあがったこけら寿司を笑顔で食べました。すべての体験プログラムは、高知県東部地域ならではの地域資源を活かした内容で、地域の方から直接、知識や技術、想いを聴き五感で体感することができる構成になっていました。

本パンフレットを制作するにあたり、様々な地域を訪問させていただき、体験プログラムを通じて新たな学びと地域理解を得ることができました。笑顔で学生を受け入れていただきました地域の皆様、教育旅行をコーディネートしてくださった高知県東部地域博覧会推進協議会の皆様、その他多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

最後に、本パンフレットの出版をご快諾いただいた「季刊高知」編集部、野並良寛様には、企画の段階から大変お世話になりました。また、厳しいスケジュールを調整いただきました。ご尽力に感謝いたします。

今城逸雄
赤池慎吾

皆さんへ

本書を執筆するにあたり、体験プログラムをどのように効果的な学びにつなげることができるのかについて、学生たちの「生の声」を盛り込み、使いやすく・わかりやすい冊子の編集を心掛けました。ぜひ、ご活用ください。

執筆者一覧

今城逸雄（高知大学地域連携推進センター　域学連携推進部門長［教育担当］）

赤池慎吾（高知大学地域連携推進センター　特任講師）

森　明香（高知大学地域連携推進センター　助教）

大道知未（高知大学地域連携推進センター　特任専門職員）

監修

高知大学地域連携推進センター

本書は、東部博パンフレット制作事業の成果物です。
なお、本書及び東部博体験プログラム磨き上げ事業は、「高知大学インサイド・コミュニティ・システム（KICS）化事業」（地（知）の拠点整備事業）の成果の一部です。

高知大学地域連携推進センター監修

体験を学びつなげるパンフレット

高知県東部地域体験旅行

発行／高知大学地域連携推進センター
高知県高知市朝倉本町二丁目 17 番 47 号
監修／高知大学地域連携推進センター
編集・デザイン協力／
「季刊高知」編集部　キャップ・デザイン・スタジオ
発行日／平成 27 年 12 月